

氏 名	エレナ バイビコフ Elena Baibikov
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 397 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 文 明 学 専 攻
学位論文題目	Translator-Target Text Relationship : Reading Japanese Translations of Chekhov's Letters to His Wife (翻訳者と翻訳テキストとの相互関係：チェーホフ「妻への手紙」の日本語訳 を読んで)
論文調査委員	(主 査) 教 授 前 川 玲 子 教 授 木 村 崇 教 授 服 部 文 昭

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、A. チューホフの妻への書簡の複数の日本語訳の比較検討という具体的な事例研究をとおして、翻訳者の翻訳テキストに対する主要なアプローチおよび翻訳者の職業アイデンティティの形成、再形成プロセスを詳細に記述することで、これまで翻訳研究において扱われることの少なかった翻訳者の個性とその選択する職業行為モデルおよび翻訳技術との関係を体系化しようとするものである。

全体は序論と4つの章および結語からなる。序論において本論を先行研究の中で位置づけた後に、まず第1章では、W. ベンヤミン、E. ナイダ、L. ヴェヌスティなどの翻訳理論を踏まえ、翻訳者のアプローチを、1) 改革的アプローチ、2) 文化学的アプローチ、3) 情動的アプローチ、4) イデオロギー的アプローチとして4つに分類する。さらに、より広い理論的文脈にこれらを位置づけるために、翻訳者のアプローチのマトリックスを定式化する。縦軸では、翻訳を通じて自文化の変容を図ろうとする「ミッション」(使命)重視の姿勢と、外国語テキストの自国語への忠実な「トランスミッション」(伝達)を重視する姿勢とを対立させる。他方、横軸では外国語やその文化的背景を自文化の文脈に置きなおして読者の違和感を取り除こうとする「ドメスティケーション」(馴化)に重きをおく姿勢と、外国語と外国文化の異質性をあえて提示することで読者を異文化の世界に誘おうとする「フォーリナイゼーション」(異化)を重視する姿勢とが対置される。

第2章は理論的枠組みを述べた第1章と、ケース・スタディ(事例研究)を扱う第3章と第4章を結ぶための章である。ここでは、これらのケース・スタディに関わる歴史的背景として、明治以降の日本におけるロシア文学の翻訳の歴史と翻訳者の職業アイデンティティの形成の過程を概観する。特に日本における女性翻訳者の先駆者的存在と目される湯浅芳子を、翻訳という職業が階級、ジェンダーの枠を超えて専門職として定着していく過渡期の困難さを体現する人物として紹介する。

第3章は、申請者の二つのケース・スタディの一つ目であり、翻訳者の職業アイデンティティの形成・再形成プロセスと翻訳者としての職業行為の実践を、湯浅芳子を対象に検証する。申請者は、文化的コンテキスト理論に基く翻訳テキストと改訳テキストとの比較によるA. ヴェジュビツカの分析を援用しながら、チューホフ『妻への手紙』のロシア語原文と初版および二度の改訂版のテキストを比較する。翻訳者のアプローチの仕方が文化学的アプローチからイデオロギー的アプローチへと変わるにしたがって、職業行為にも変化が現れることが明らかにされる。さらに、湯浅の翻訳テキストに対するアプローチが変化するとともに、その変化の刻印が翻訳テキストの中にみられることが実証的に辿られる。

第二のケーススタディとなる第4章では、湯浅芳子、池田健太郎、牧原 純および中本信幸が行った『妻への手紙』の翻訳の比較分析を通じて、実践的次元での翻訳テキストに対する4つの主要なアプローチが、翻訳者の4つの職業行為として現れることを述べる。ここでは、L. モリナやA. H. アルビルが提唱した翻訳技術の分類に基いて、同一原文テキストの異なる翻訳(パラレル・トランスレーション)を比較検討することによって、異なった職業行為モデルの採用は互いに異なったテキストの創造をもたらし、相違はテキストの表現方法にも、また内容の次元にも現れることが具体的に明らかにされる。

すなわち、複数の翻訳者によるチェーホフの書簡の日本語訳を比較し、職業行為の各パターンには特有の支配的（望ましい）翻訳技術があり、例えば、1）逐語訳技術（改革的モデル）、2）アンプリフィケーション（拡大化）技術（文化学的モデル）、3）記述技術（情報的モデル）、4）バリエーション翻訳技術（イデオロギー的モデル）などの対応関係があることが実証的に示される。

結語において、申請者は、第1章における翻訳の4つのアプローチが、使命と伝達、異化と馴化という異なったベクトルの中で動いているという理論的分析と、その後の二つのケース・スタディとの関係に再度立ち返る。翻訳家のアプローチが、それに対応する職業行為モデルを生み、特定の翻訳技術の主体的選択につながっていくという申請者の主張は、ケース・スタディによって証明されたことが確認される。さらなる翻訳研究の理論化と、理論と実践との橋渡しが必要と述べられ、今後この方法をいっそう練成していく方向性が示唆される。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

翻訳学は、文学作品、批評などの研究に比べ相対的に未発達な分野であり、翻訳者は、作家や批評家に比べて副次的な扱いしか受けてこなかったことが多かった。こうしたなかで、本学位申請論文は、翻訳者の個性およびその職業行為と職業技術の研究対象とする現代翻訳学の最新の流れに沿い、申請者の母語であるロシア語の書簡体作品の日本語への翻訳を具体的なケース・スタディとして用いることで、翻訳学の分野に新しい視点を提供するものである。このケース・スタディは日露翻訳という二言語に限定されたものであるが、本論文は英語で書かれ、国際社会にむけて開かれた論文となっている。

第1章は、これまでの翻訳理論を整理し、異化と馴化、使命と伝達といったマトリックスのなかに翻訳者の異なるアプローチを位置づけることで、翻訳者がなぜ特定の翻訳の仕方を選ぶのかを理論的に提示している。翻訳者とテキストとの相互関係を、規範的な理論モデルを使って定式化するにあたっては、申請者はロシア語文献と英語文献を丹念に渉猟し、翻訳者のアプローチから職業行為、具体的翻訳技術の選択といった一連のプロセスにつながる理論的根拠を明らかにしている。多少機械的な定式化がはかられているきらいがあるとはいえ、これまで翻訳テキストに対する翻訳者の主要なアプローチの記述と分類を課題とする専門的な翻訳研究が立ち遅れていたことを考慮すると、旧来の翻訳論を統合的に整理、叙述した点において十分に評価できる。

第2章は短い章であるが、近代日本におけるロシア文学の重要性を日本のロシア文学翻訳者というレンズを通して再検討し、大正から昭和にいたる時期に翻訳家が一つの職業として市民権を獲得するにいたるプロセスに光をあてていることは注目に値する。さらに、湯浅芳子のように労働者階級出身の女性が翻訳家というアイデンティティを獲得していくことで、一人の人間として力を獲得していく過程を丁寧に辿っているところでは、ジェンダー的な視点が内容に溶け込み、より豊かな内容になっている点も評価できる。

第3章では、チェーホフ『妻への手紙』の湯浅芳子訳に焦点をあて、彼女の翻訳が改訂を重ねるたびにどのように変化していったかを丹念に追い、その翻訳テキストの変化の一要因を、翻訳作業に携わっていた時期の手紙やエッセイ、あるいは翻訳テキストの前書きや後書きといったテキスト外の資料をもとに彼女の人生観や社会観、人間関係の変遷のなかに探ろうとする。申請者は、未出版文献を含めた日本語資料を読み解くという困難な作業を見事に完成させた。その結果は、今まで宮本百合子との関係を中心とした1920年代の伝記的事実に限定されて論じられることの多かった湯浅の翻訳者としてのアイデンティティの形成および再形成過程の、より広い視野からの再検証、解明へと至り、この点も十分評価に値する。

第4章は、モリナとアルビルの先行研究を踏まえ、彼等が提唱した翻訳技術の分類に基づいて翻訳の比較研究を行っており、湯浅、池田、牧原／中本（共訳）のチェーホフ書簡の翻訳を具体的にとりあげて論じる。この分析には、母語に存在しない異質な文化習慣、儀式、概念、男女関係などをいかに母語の言語環境、文化・社会環境に移植させるかという大きな問題が底流にある。翻訳技術の選択というミクロの問題は、実は第1章で導入された異化と馴化および自国文化の改革者としての翻訳者と無色透明な伝達者との関係といったマクロの問題を内包していることが明らかにされている。

結語となる最終章で、申請者は、翻訳技術の選択は偶然の産物であるようにみえながら、実は、翻訳者の翻訳テキストに対するアプローチ、そしてそこから生まれる職業行為モデルから生じる必然のプロセスであると示唆する。翻訳者の主体的、能動的な心的構え、専門家としての行動、そこから生まれる翻訳テキストという三者の関係性を浮き彫りにして論を結んで

いる点で、この申請論文は一貫性をもっており、構成、内容ともに高い水準に達している。

本論文には、日本語を母語としない申請者が翻訳者を取りまく日本特有の諸条件を十分に理解しつつも、なお残る小さな齟齬や、翻訳理論構築と翻訳実践の諸問題との間の溝を埋め切れていない憾みもある。しかし、このようないくつかの瑕疵は、本論文が翻訳学の分野に提供しえた新しい知見を損ねるほどのものではなく、今後の研究の継続によって十分に補正しうるものである。とりわけ本学位申請論文は、異なる文明・文化間における共生の可能性に注目する研究を目指して創設された共生文明学専攻現代文明論講座にふさわしい内容を備えているものと言える。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。